

2021. 10. 10 (日) マタイ27:11~14

27:11 さて、イエスは総督の前に立たれた。総督はイエスに尋ねた。「あなたはユダヤ人の王なのか。」イエスは言われた。「あなたがそう言っています。」

27:12 しかし、祭司長たちや長老たちが訴えている間は、何もお答えにならなかった。

27:13 そのとき、ピラトはイエスに言った。「あんなにも、あなたに不利な証言をしているのが聞こえないのか。」

27:14 それでもイエスは、どのような訴えに対しても一言もお答えにならなかった。それには総督も非常に驚いた。

<説教>

〈さて、イエスは総督の前に立たれた。〉(27:11)と始まります。

これは、場面としては〈さて夜が明けると、祭司長たちと民の長老たちは全員で、イエスを死刑にするために協議した。そしてイエスを縛って連れ出し、総督ピラトに引き渡した。〉(27,1,2)の続きです。

既に説明したように、ユダヤ人の祭司長たちや長老たちはイエスを神冒瀆の罪で死刑に決めましたが、それだけでは実際にイエスを殺すことはできませんでした。

最終的な判決と、有罪ならそれに基づく死刑の執行の権限は、当時ユダヤ人を支配していたローマ帝国から派遣されていた総督ピラトにありました。

こうして祭司長たちや長老たちから犯罪者として総督ピラトに訴えられたイエスは「被告人」として「裁判官・審判者」である〈総督〉の前に〈立た(さ)れた〉のです。

ただし、大帝国ローマの権威をまとった〈総督〉ピラトの裁判官、審判者としての権威はどこまでも地上のもの、この世のものであり、それ故に過ちそして不正さをも有りうる危ういものでした(事実この後ピラトは不正な判決をくだすことになりました)。

これも既に見たように、イエスこそはやがて〈力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来る〉(26:64)真の栄光ある最終審判者なのです。

そのイエスが、ユダヤ人から徹底的に低く安く〈値積された人〉(9)、邪魔だ不要だ無用だ有害だ、殺されてしまえと訴えられた被告人としてこの世の裁判官〈総督〉ピラトの前に立たれたのです。

そのように惨めなユダヤ人としか見えないイエスに対して、〈総督は〉〈「あなたはユダヤ人の王なのか。」〉と〈イエスに尋ねた〉のでした(11)。

この問いは祭司長たちや長老たちの訴えを受けたものだったに違いありません。

ルカ 23:1-3 には〈集まっていた彼ら全員は立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。そしてイエスを訴え始めて、こう言った。「この者はわが民を惑わし、カエサルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることが分かりました。」そこでピラトはイエスに尋ねた。「あなたはユダヤ人の王なのか。」〉と書かれています。

祭司長たちや長老たちはイエスに対する〈ねたみ〉(27:18)、悪意をもって、イエスはローマ皇帝に反逆する犯罪者だと訴えたのでした。

ピラトに対するイエスの答えは〈「あなたがそう言っています。」〉でした(11)。

新改訳第三版では「そのとおりです。」(口語訳「そのとおりである。」)と訳されている

ますが、直訳的には「**あなたがそう言っています。**」(新共同訳「それは、あなたが言っていることです」)です。

ヨハネ 18:34 にはこのときのイエスの答えが、「あなたは、そのことを自分で言っているのですか。それともわたしのことを、ほかの人々があなたに話したのですか。」というように記されています。

そしてそれに対してピラトが「私はユダヤ人なのか。あなたの同胞と祭司長たちが、あなたを私に引き渡したのだ。あなたは何をしたのか。」(18:35)と答え、次にイエスが「わたしの国はこの世のものではありません。…事実、わたしの国はこの世のものではありません。」(18:36)とお答えになり、更にピラトが「それでは、あなたは王なのか。」と言うとイエスは「わたしが王であることは、あなたの言うとおりにです。…」とお答えになりました(18:37)。

これらを考え合わせると、以前の訳が表しているように「あなたの言うとおりに、わたしはユダヤ人の王である」とイエスは確かにピラトに言われたのですが、同時に「ただし、祭司長たちや長老たちが訴えているような王ではないし、あなたが考えているような王でもない」と言われたのでしよう。

更に、「あなたの責任は、この世の裁判官としては、祭司長たちや長老たちの訴えが正しいかどうかよく考え、自分の良心に従った正しい判決を出すことである。そしてわたしが王であることについても正しく知るべきである。」そうピラトを論されたのでもあると思います。

おそらくイエスの言われたことをピラトはよく理解できなかったでしょう。

しかしよくは理解できないなりに、祭司長たちや長老たちが訴えているような「王」ではないようだとは気づき始めたのだと思います。

さてその〈祭司長たちや長老たち〉はイエスを〈訴え〉続けていましたが、そちらにはイエスは〈何もお答えにならなかった〉、つまり弁明しようとしませんでした(27:12)。

それでピラトが〈**あんなにも、あなたに不利な証言をしているのが聞こえないのか。**〉、「いや聞こえているはずだ。不利な証言に対してはちゃんと弁明、反論して自分の潔白を主張するべきだ。私がいままでやって来た裁判では被告人は皆そうしていた。そうでなければ不利な証言を認めることになり、あなたは有罪となり、死ぬことになる。普通の人はそんなことは絶対にしない。」そうピラトはイエスを促したのでしよう。

〈**それでもイエスは、どのような訴えに対しても一言もお答えにならなかった。それには総督も非常に驚いた。**〉(27:14)のでした。

人間なら、ましてや(権力を手に入れた)王なら絶対に死にたくない、一日でも長く生き延びたい、そのためには無罪放免を望むのが普通なのに、イエスはまるで有罪・死刑判決を望んでいるかのようにピラトには見え、〈**非常に驚いた**〉のでしよう。

そう考えるとイエスが〈**どのような訴えに対しても一言もお答えにならなかった**〉理由が少し想像できます。

もし被告人が弁明、反論をすれば裁判官はその証拠を更に集めなければならず、判決が延び、刑の執行も延びてしまいます。

しかし父なる神の御意思(みこころ)は、過越の子羊が屠られるこの日に、イエスが私たちの罪のために、〈**世の罪を取り除く神の子羊**〉(ヨハネ 1:29)として十字架で死なれる

ことでした。

十字架で死なれることだけでなく、その「時」も、全て父なる神の定めに完全にお従いになるためにイエスはこの世の裁判官〈**総督の前に**〉、ピラトの審判の場に〈**立たれた**〉(11)のです(そして「罪は認められないが死刑」という判決をお受けになりました)。

それは〈一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている〉(ヘブル 9:27)私たち罪人が神のさばき、イエスの審判の座で、「罪は認められるが、イエスのおかげで死刑(地獄の永遠の滅び)は免除」という判決を受けるためなのです。

私たちは今の世にあるうちに、このイエスを「私の救い主」「私の王」として受け入れ、生涯をかけて信頼し、従って行かなければなりません。